

ずいそう

多様性と柔軟性の国インド

中 田 利 治



今年の10月はじめ、親しい友人3人と三度目のインド旅行をした。今回はインドの人々の生活をより近くで見たいと考え、公共交通機関は一切使用せず、デリーを出発し、アグラ、ジャイプール、ジョードプル、プスカルを巡り、デリーに戻るまでの約1,400 kmの全行程をガイドとドライバー付きのワンボックスカーで巡った。

この旅で一土木技術者の目から見たインド道路や交通の印象を紹介したい。全体的な印象は「多様性と柔軟性に富んだ国」に加え、「親日的な国」である。

1. 交通手段は多種多様

デリー市内ではトラック、バス、乗用車、オートバイに加え三力車（サンリキシャ：小型三輪トラックの荷台に座席を設置したタクシーで燃料はCNG）が多いのが目につく程度であったが、郊外では車以外の多種多様な交通（運搬）手段が活躍しているのに驚いた。

馬、ロバ、ラクダなどの家畜に曳かれた荷車、テラ（乗用型の耕耘機）に曳かれた台車、自転車、リヤカーなどである。なかでもテラは、国道をトラック並みの速度で走るだけでなく、運転台に座席を設け乗用として使用されていたり、牽引する台車はタンクローリーやダンプなど使用目的に合うようなバリエーションがある（写真-1）。

車のサイズも軽三輪並の三力車から大型トレーラまで多種多様である。特に、トレーラは軸数が多いだけでなく高さが4m、長さが20mを超えられると思われる巨大なものも走っている（写真-2）。

2. 有料道路でも車以外は無料

我々が車で巡ったインド北西部は幹線道路の整備がかなり進んでおり、各所に有料道路があった。幹線道路は中央部の自動車走行用レーン（往復4または6車線）に平行して両側に側道が設けてある。この側道があるお陰で、自動車専用ではなく車以外の交通手段も通行できる構造になっている。しかも、有料区間でも通行料金を払うのは中央部の料金ゲートを通過するトラック、バス、乗用車だけであるとのことで、それ以外の交通手段や歩行者、放牧（遊牧）の牛、羊、ラクダは、側道を無料で利用できる。

家畜が、側道端の草を食みながらゆっくり進んで行くのはのどかな風景である。

3. 車の定員は乗れるだけ

車やオートバイは日本では考えられない使い方がされている。インドで一般的オートバイは排気量100～125cc前後のもので、これに二人乗りするのが普通で、そのためのステップが取り付けられている。男同士の二人乗りでは、後部座席に跨がっているが、女性の場合は左側を向いて腰掛けているので、危なかつしいことこのうえない。

でも、この程度で驚いてはいけない。家族5人が一台のオートバイに乗っているのを何度も目にした。例えば、ガソリンタンクの上に4・5歳の男の子、次に父親（ライダー）、父親と母親の間に幼い子供、一番後ろに赤子を背負った母親の合計5人である。母親が赤子を抱えている場合もあるので、見ている方ははらはらする。

三力車（サンリキシャ）の乗り方も驚異的である。小さい車体に3列の座席があり9名というだけでも驚きであるが、座席の間や運転席の両脇、更に車の上にも乗っている場合もある（写真-3）。

オートバイも三力車（サンリキシャ）も我々から見ると危険このうえないが、ガイドの話では、事故を起こさない限り警察が取り締まることはないとのことで、柔軟性の富んだ対応にインドのお国柄を感じた。

4. インドの人は親日的

交通事情の話からそれるが、歩いていて街行く人々から何度か「チャイニーズ？ コリアン？」と問いかけられ、「ジャパニーズ」と答えると。「オー、ジャパニ（ヒンズー語の日本人の意味）」と聞いて「日本は、美しい国、技術の先進国」とか「インドが中国と戦争している時、食料援助してくれた国」など、友好的な会話が進んだ。この会話を通じて、逆に自分がインドだけでなく近隣諸国の事情をどの程度理解しているかを大いに反省しながら帰途についた次第である。

——なかだ としはる 一般社団法人 日本建設機械施工協会
関西支部 技術部長——



写真-1 テラ（タンク車）



写真-2 巨大なトレーラ



写真-3 三力車